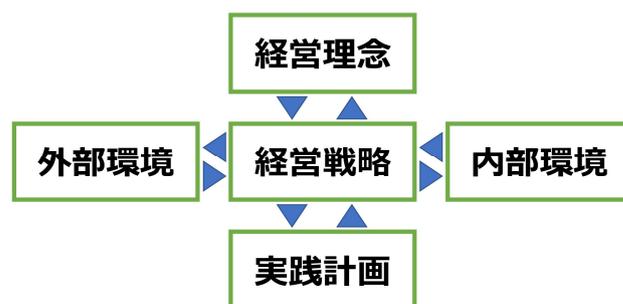


おわりに

企業経営漫談士 岡野実空

このシリーズでは、まず内外の「経営環境」を考察した上で、自社の「経営理念」を見直し、ときには制約条件ともなる「実践計画」の実態を確認して、外堀を埋めてから、「経営戦略」策定の要点を確認しました。またその過程で、これまで「経営」と並行して学んできた「仏教」との共通項を探りました。今回はその全体を振り返り、それらすべての基礎となる考え方を、2つの『四字熟語』で確認して、今シリーズのまとめとします。

(今後は、これまでの2つのシリーズの付録を掲載予定)



『如実知伝』

今回、多くの熟語の解説に引用してきた仏教の歴史や思想。その祖である釈迦の「悟り」の原点は『如実知見』、すなわちものごとを「ありのままに見る」ことです。それは企業の「経営」もまったく同じであり、内外の「環境」、自社の「理念」や「風土」などを「ありのままに見る」ことなく、妥当な「戦略」を策定することは到底不可能です。

とはいえ個人の見方は、どうしても先入観に囚われ、自分の得意分野に偏りがち。またその集団も徐々に多様性を排除し、秩序や効率重視の方向に進むのが世の常です。それを防ぐためには、自分や自組織にはない視点の「ありのまま」の指摘に目を向け、その意見に耳を傾けなければなりません。

またそうして策定された「戦略」を、「戦術」として実行できるか否かは、関与する現場とのコミュニケーションに懸かっています。その要諦は、釈尊由来の「人を見て法を説く」。各現場の能力や特性に合わせた話法で、メンバーの納得と実行の誓約を得なければなりません。それこそ「方便」の本意ですが、我が国では「嘘も方便」という偏った便宜の手段として、世に喧伝されてしまいました。

さて以上のように、ミドルが果たすべき「パイプ役」を濃縮した四字熟語が、今回の『如実知伝』。それは『アナと雪の女王』よろしく、「ありのまま」を正見、「知識」を正思して、内外に正語し、組織を正業へと導く、『八正道』(見・思・語・業・命・精進・念・定)の参道なのです。

『自覚知足』

釈尊は35歳で『自覚』(自ら悟りを開くこと)。その後は80歳の入滅直前まで、「覚他」(他人をも悟らせること)に努められました。その「要諦」はこのシリーズ冒頭で「四法印」として取り上げましたが、「覚他」対象の一人として、釈尊の倍、すなわち古稀まで考えた私の結論は以下のとおりです。

すなわち「四法印」は、「諸行無常」と「諸法無我」に、小乗の「一切皆苦」と大乘の「涅槃寂靜」を加えた『悟り』の基礎。それを土台とした個々の『覚悟』とは、自分の人生を測る「固有」の「ものさし」のこと。すなわちそれを見出すのが『覚り』、実際にそれで人生を測り直し、自分の価値を確認するのが『悟り』です。またそれを補助するのが『知足』という目安。ここまでは到達しようという下限と、これ以上は不要という目盛です。それらを持たない人間が、カネや名誉という「汎用」の「ものさし」で、上限のない「強欲」や、他人との比較による「嫉妬」という罠に落ちるのは必然なのです。

さて我が「知足」は、先の『三々な経営』が下限、このシリーズが上限。またその中間で、これまで別々に学んできた「仏教」と「経営」が合流するという、思わぬ余禄に預かることができました。

今後は、下限到達記念の法号「実空」に、余禄の証としての道号「仏経」を加え、さらに精進しますが、その遺漏を思い付く度に、『付録』として補足して行きます。これまでのご笑読に深謝！合掌！！

2020年4月13日 実空